

タイトル：2019年度 教育セミナー（第15回）

日時：2019年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

「オスマン帝国の解体」

藤波 伸嘉（津田塾大学）

本セミナーでは、「オスマン帝国の解体」と題して、修士論文や博士論文の執筆に当たり、どのように独自の問題設定を立て、それをどのように研究史に位置付けるのか、さらには、どのようにして既存の研究史の流れにとらわれない新たな研究領域を開拓すればよいのか、という問題を講じた。

具体的には、まず「オスマン帝国の解体」をめぐる研究史を概観したうえで、近代オスマン帝国にまつわるさまざまな事象を「解体」という相から眺めることによってどのような偏りが生ずるのか、「解体」を軸に据える史観はどのように生じたのか、そしてそのような視座は隣接する諸研究領域の研究史との関係でどのように評価されるのかという点を確認した。

ついで、「解体」史観の再検討に資するべく、1) ギリシア正教徒の世界と、2) 「統一派＝青年トルコ」中心史観という、二つの切り口を提示した。前者に関しては、まず、近代の正教徒をめぐる「ギリシア史」や「ブルガリア史」といった国ごと、研究史ごとの問題意識のズレが大きいこと、単に非ムスリムの存在を「トルコ史」に組み込むだけでは既存の研究史の超克にはつながらないことを指摘した。そのうえで、近代のギリシア正教徒の世界は、正教会の管区や正教徒通商網の広がりによって規定されている部分が多いこと、したがってこの時代のギリシア正教徒の生は必ずしも主権国家としてのオスマン領の縮減と軌を一にはしていなかったことを論じた。後者については、既存の研究史では、肯定的であると否定的であるにかかわらず、1908年の青年トルコ革命以降のあらゆる事象の責を「統一派＝青年トルコ」に負わせる傾向が強いことを指摘したうえで、しかし実際には統一派と青年トルコが指す対象は異なるし、そこに属した人々は、同時代のオスマン社会に存在した数限りない行為主体の中の一つにすぎないことを説明した。そして、統一派にせよ青年トルコにせよ、そこには多くの非トルコ系の人々が含まれていたのであり、シリアであれイラクであれアルバニアであれ、戦間期の政治過程や思想潮流は、1890年代以来の人脈や政治遍歴を踏まえなければ理解できないことを論じた。

以上二つの切り口からは、近代オスマン社会の人々は、主権国家の境界線の変動にのみ規定される形で生きていたわけではないし、彼らが有した相互のつながりやその広がり、国境線にとらわれない生活や交流の場を提供していたことが浮かび上がってくる。「多民族帝国の民族国家への不可避的な解体」という通俗的な発想を前提とした研究史の理解からは、このような生のありかたをめぐる個別の問題設定はそもそも立ち上がらない。既存の研究史自体を相対化する必要がある所以であり、修士論文や博士論文における研究史の紹介が単なる既往研究の羅列におちいつてはならない所以でもある。結論として、研究史に対する批判的な接近があつてこそ、独自の問題設定が可能になると論じることで本報告を閉じた。